ラウンドテーブルセッション 2

高齢者の臨床予防歯科

発表者：川上誠

このタイトルを提出するに至った経緯

- ウエルビーイングは、ここ2～3年「（数年後ではない10年後の）将来構想」を考え続けてきた。

そこで、形として現れてきたのが、高齢者の臨床予防歯科である。

・メンバーも、団塊の世代前後の人たちも多く、これから自らをデータとしながら、実感していくわけで、この年齢からの健康を考えていくのは、非常に有意義であると考えられる。

アンケート調査について

- 内容

・団塊の世代から高齢期にかけての口腔内の現状

・上記世代の、QOL、健康観、口腔内の状況、生活実態の変化などの相互の関連

・団塊の世代から高齢期に至るまでの時系列変化を捉える

○ ディスカッション

▽ WB が試用中の高齢者アンケートの項目について

- 唾液の減少や口腔乾燥に関連するので服薬の種類を入れたらどうだろうか？
- 8020 とは言うが、歯の数ではなく、機能している歯を咬合支持やアイヒナーの分類を使って組み込んだらどうか？
- 自由記載で質的調査も入れてみてはどうか

▽ アンケートの対象者や目的について

- 診療室と地域とターゲットを絞った方がいい？
- 診療室では元気な人のみが回答者になってしまうので、バイアスがある
- 前向き調査か後向き調査かをもっと明確に

Copyrightc2007 Well-Being(NPO),All rights reserved

・ 年齢や男女比でターゲットが変わってくるのでは？

▽ アンケートの信憑性や他の調査との比較

・ QOL の指標には国際的な文献の裏づけもある。SF36 やその短縮版の SF8
　参考HP　iHope International　http://www.i-hope.jp/
・ ヘルスケア研究会でも行っている。
・ 痛みとの関連やかかりつけ医の有無で寿命の差があるというような研究もある。
・ 国診調で 80 歳以上の国保の高齢者の調査は行っているので、専門的な調査はそこに任せて、コミュニケーションに絞ってもいいのでは？

▽ アンケートをとってみてわかったこと、よかったこと

・ 患者さんの新しい面が見えてきた。来院者とコミュニケーションをとるためのツールとして役だった。
・ 話しているうちに内科など他科疾患へもアプローチできた。
・ 歯科医が見る高齢者の健康はついつい偏ってしまうので、広い意味で見るとちょっと違った健康が見えてくる。
・ 高齢者は個人差が大きいので傾向を見るというよりも違いを見るように役立てては？

▽ 医科や行政との連携

・ 医科では特定健診を新しくして 40 歳以上は全員受診という話しがあるが、その中に歯科の話は全く出てこない。歯科を入れるためにはもっと根拠に基づいたアンケートのデータ蓄積が必要では？
・ 同様に、現在行われている特定高齢者の調査に入っている歯科分野の項目は使い物になっていないようだ。
・ 行政からの介護予防にも歯科からのアプローチは少ない

▽ 高齢者アンケートへの今後の希望

・ 普及させるのだったらもっと医院の負担を減らす方式がいいのでは？（項目を少なく、記載式になど）
・ 定期健診とアンケートを結ぶものが欲しい
・ 地域で検診の際、ただ検診するだけではなく、受診行動に結びつけるよう、このアンケートを利用しては？
・ 紹介システム（バトンタッチネット）にこのアンケートが取れる診療室である、ということを入れてもいいのでは？

記録者：藤田孝一

Copyrightc2007 Well-Being(NPO),All rights reserved